

## 横山 晃一郎教授 追悼論文集

<https://doi.org/10.15017/10696>

---

出版情報：法政研究. 56 (3/4), pp.1-16, 1990-03-24. 九州大学法政学会  
バージョン：  
権利関係：

## 弔 辞

横山さん、年来の御高誼に甘え、いつものように、こう呼ばせていただきます。横山さん、あなたの急逝に、我々九州大学法学部の同僚一同、茫然自失、声もありません。

横山さん、あなたは、一九七四年四月、わが九州大学法学部に刑事訴訟法講座担当の教授として着任されてこの方十五年、研究に教育に正に率先躬行、粉骨碎身されました。熊本は山鹿の御出身で、旧制第五高等学校から一九五三年三月名古屋大学法学部を御卒業、自来、同助手、さらに愛知学院大学講師・助教授・教授として多年蓄積してこられた学殖を惜しみなく傾注しての、華々しくも精力的な御活躍でした。

横山さん、あなたの鋭い論鋒は、寸鉄、よく権力の心胆を寒からしめました。が、打って変わって、われわれの及びもつかぬ深く敬虔な信仰に強く裏打ちされた、温和、春風の如き御人柄は、接するものすべてを魅了してやまず、同僚、学生のひとしく敬慕、敬愛措く能わざるところでした。

横山さん、あなたの学問が、学生時代にされたという大仏次郎の“ドレフュス事件”から出発し、理論と実践を統合した“冤罪の弾劾”にひとつの頂点を見出したことは、決して故ないこととは思われません。それがあなたの人格の本質を成す“他人の苦しみを己が苦しみとする”真正のヒューマニズムの発露・結実にはかならぬこと、寸毫の疑いもないからです。

弔 辞

横山さん、あなたとしては、まだまだやり残された仕事がおありになったことでしょう。病い勝ちとなられたここ二、三年、却って猛烈さを増した御執筆活動振り、そして、今は絶筆となった本年三月二十五日号のジュリスト誌所

甲 辞

載の論文を「ウイ・シャル・オーバークム」と題され、この歌詞のリフレインで結んでおられること、いずれにも、自らに課されたお仕事の完成のため敢然病いに立ち向かい、これに打ち克とうとする強い意思の力がまざまざと窺えます。

横山さん、しかし今はどうか安らかに永久とわの眠りをお眠り下さい。あなたが多くの人々に心に蒔かれた真理と正義への愛の種子は必ずや立派に芽ぶき、あなたの遺業を継承し大成させてゆくに違いありません。願わくは、天上より、そのようなわれわれの営みをみそなわし、嘉せられんことを。

一九八九年四月二十七日

九州大学法学部長 手島 孝